
「石神は……恋をしていたのだらう」

臭い足の裏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「石神は……恋をしていたのだろう」

【コード】

N0487Q

【作者名】

臭い足の裏

【あらすじ】

テレビでやっていたから書きたくなつた。

東野圭吾ファンは読まないでね!!!!!!

(前書き)

先に言っておく。俺はバカだ。

「え？ 湯川先生、石神が恋をしていたって？」

「ここは湯川の研究室。今は湯川と内海以外にだれもいない。」

湯川の呟きに、思わず聞いてしまった内海。

「彼はこう僕に言ったんだ。」

『僕は毎日花岡の家に忍び込んで、花岡靖子の下着と、美里ちゃんの下着とリコーダーの上部分を盗んで家に持ち帰るんだ。そしてそれをおかずに毎日オナニーをするんだ。盗んだ下着は、ひとしきり嗅いだ後、身体に擦りつけるんだ。そして最後はそれを使ってちんこをしごくんだ。とても気持ちいいんだよ。リコーダーはね、ひとしきりしゃぶったあと、お尻の穴に突っ込むんだ。そして満足したら、それらを乾かして元あった場所に戻す。その戻した下着を彼女たちが履いてるのを想像してもう一度オナニーするんだ』

僕はなんて愛情にあふれているんだと思ったよ。彼の、彼女たちに対するその一途さが僕は羨ましい」

そう話す湯川の顔は笑顔だった。

「は、はあ。なんとも歪んでいるというかなんというか」

内海には理解できなかった。いや、理解できないのが通常の考えだろう。

しかし内海には、湯川がそれについて理解できているように思えた。

やはり天才は変わっている……。内海はそう思った。

「彼の言うことが恋だというなら、僕は恋をしているのかもしれない」

「え……！？ 湯川先生が！？」

驚きを隠せない内海。それもそうだろう。物理にしか興味を示さない湯川が恋をしているなんて。

しかし、いつも湯川の周りには女が群がってはいはいるが、それら

と親しくしているところを内海は見たことが無い。

おそらく一番関わっている女といえば わたしだ。

いや、それはありえない。湯川先生はわたしにそのような仕草をしたことがない。だが……、湯川先生は重度の奥手だ。もしかしたら どうしよう。心の準備がまだ整っていない。

いや、その前にわたしが湯川先生から告白されると決まったわけではない。

内海の内心には、淡い期待と、それを否定する気持ちが渦巻いていた。

「そうだ。これが恋だというのなら、恋なのだろう」

そう言いながら、湯川は内海へ目を向けた。

湯川の瞳にはなにやら熱がこもっている。

その行為は内海の心に爆弾を落とした。湯川の瞳に惹かれる。視線を外せない。

「で、それは誰なんですか？」

震える声で内海は湯川に問うた。内海の心の内ではその答えは見当がついていた。

湯川先生はわたしに恋をしているんだ。別にわたしは湯川先生に恋なんてしていない。

……でももしこれが本当にわたしだったら……湯川先生は頭は良いし、お金持ちだし、性格は捻くれてはいるけど、顔はかっこいいし付き合っただけでもいいかな。別にわたしは湯川先生のことは好きではないけど、断ったら湯川先生がかわいそうだし。

「それは………君だ。内海薫、君に恋をしている」

内海はそれを聞いた瞬間、舞い上がりそうになった。

「で、でも湯川先生？ わたしはまだ心の準備が」

照れ隠しである。内海はもう湯川と恋仲になると決めていた。

「ああ、返事はいつでもいい。僕は物理学者だ。待つには慣れている」

「湯川先生？ 私はいいですよ。湯川先生と付き合っただけです」

素直になれない内海は、照れ隠しの為にそんなことを言った。

「そうか。それはよかった」

そうやってほほ笑む湯川の顔に内海は、見惚れてしまった。

「いままで君に拒絶されるのではと言えなかったのだが、君に頼みたいことがある」

「なんですか？」

内海は内心嬉しい気持ちでそう聞いた。湯川に頼られるなんてことは滅多にないからだ。

「まずはこちらに来てくれないか？」

そう湯川に言われた内海は、大人しく従った。

「え？ ちよつと……！」

内海が湯川のそばまで来ると、急に湯川は内海を抱きしめた。

「問題ない。ここには誰もいない」

そういう問題ではない、と内海は思った。

内海が体を離そうともがくが、女の力が男の力に敵う訳がない。

「心配するな。リラックスだ」

「リラックスって言ったって……」

湯川はだんだんと内海に顔を近づけてくる。

内海も内海で、誰もいないし、鍵かかっているし声も聞こえないだろうし……もういいかな。と思ってきた。

内海は、目を閉じて身体をリラックスさせ、湯川を受け入れる体勢に入った。

「クンカクンカ」

目を閉じていた内海は、奇妙な音を聞いたので不思議に思った。しかし、自分は湯川を迎えなければいけない、いま目を開けて邪魔をするわけにはいかない。

そう思い不思議には思ったが、湯川を優先した。

「クンカクンカ」

いつまで待っても湯川は来ない。身体を抱いている感覚はあるのだが、それ以上の行為はしてこない。

それに音が止まない。

「湯川先生……?」

疑問に思った内海は、目を開けて湯川に問うた。

「クンカクンカ。ん? どうしたんだ。君はそのままリラックスしていてくれ」

なんと湯川は、内海の身体中に顔を這わせ、匂いを嗅いでいた。

「何しているんですか湯川先生!??」

そう聞いてしまつのも無理はないだろう。湯川のそんな奇行を見た内海は、パニックに陥っていた。

「何だと言われても、見ればわかるだろう。君の匂いを嗅いでいるのだが」

湯川は平然と内海に返した。

内海は、先ほどの会話を反芻してみた。

内海は、湯川が石神のどうたらこうたらな行為について恋と言ったのを思い出した。ということは、匂いを嗅ぎたい相手と言うのがその恋の対象なのか。

「そんなに簡単に……って、もういいです。好きにしてください」

内海も内海ですこし嬉しかった。匂いを嗅ぐということが驚いたが、それでも求められているということだ。内海はそれだけで多幸感を覚えた。

内海はそう言うのと本当に脱力し、湯川に任せることにした。

「そうか。ならば本気で行かせてもらう」

湯川は一度大きく息を吸うと、内海に飛びついた。

「内海! 内海! 内海! 内海! 内海! いいいいいいわああああああああああああああああん!!!」

あああああああああああああっ! ああああああああ!

!!! 内海内海内海うっうわあああああ!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0487q/>

「石神は.....恋をしていたのだろう」

2011年11月17日00時13分発行